

仙台教区報

発行所 カトリック仙台教区事務所
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話〇二二二一七三七七
 編集・発行人 三浦 平三

内外ともに試練の一九八四年迎う

今こそ「キリストの平和を社会に」

政局の混迷が深まるという総選挙結果で、一九八三年は終った。平和の願いや核兵器廃絶の叫びにもかわらず、世界各地で戦火がくすぶり続けている。また技術の進歩や経済発展のおかげで、社会不安を助長するような出来事があると絶えず、社会の風潮はますます神から遠ざかってゆくように見える。

教会も同様、宣教司牧や教会財政の面などで諸問題の解決はすべきだし。加えて私たちめいめいが抱える問題も、やはり容易なものではない。内外ともに試練にみちた一九八四年を迎えたのである。

試練には福音の光で

救い主イエズス・キリストがお生れになつた二千年前は、今より希望のある時代だったのだろうか。救い主は、人間が最も惨めなとき、打ちひしがれているとき希望を与えてくれたのではなかつたらうか。むしろこうした試練の時代だから、私たちは救い主への信仰をつよくもつべきだろう。世俗的な手段での

解決だけに目を奪われずに、救い主の教えた福音の光に照らしてみるなら、キリストの平和による解決が得られるであろう。すべての聖人たちがそのことの証人である。

司牧目標の最終年

私たちはまず、平和への熱烈な祈りからこの年を始めよう。世俗の風潮に流されずに、福音によって試練を乗り越えようとすれば、正しい熱心な祈りで神と固く結ばれていなければならぬからである。

キリストの平和をかかげた三年間の教区司牧目標は、過去二年間に各家庭と小教区教会で育成し、実践してきた。最終の今年はいよいよ、社会に向けてキリストの平和を働きかけることになった。このことは同時に、試練にみちた新しい年のぞむ、私たち信者の心がまえを示していることにもなる。

神とのかかわりを抜いては、どんな人間の努力も正しい秩序を打ち立てることはできない、と私たちは信じている。表面的な安らぎ

や一時的静けさを越えて、キリストの平和こそが人類を救うものと確信している。その信仰をもって、試練に立ち向ってゆこう。

キリストの平和を社会に

地域社会で、職場や学校で、それぞれの職務を通して、世俗的ではない、キリストの平和をひろめてゆくことは、救い主のみ業への参加でもある。さらに、現代社会に教会が、一人ひとりの信者が何が出来るとかという問いにこたえる、強烈なアピールでもある。

司教年頭書簡や作成が期待される手引き書で、小教区教会や信者各自が、その具体的実践を工夫して、キリストの平和を社会におよぼしてゆこう。

司教日程 (12月20日現在)

- 1月1日 新年の平和ミサ(元寺小路)
- 8日 修道名のお祝い、新年会(元寺小路)
- 9日 教区司祭団役員会
- 10/11日 カリタス・ジャパン全国研修会準備会(東京)
- 12日 常任司教委員会(東京)
- 12/13日 神学校常任司教委員会(東京)
- 16/18日 カリタス・ジャパン難民キャンプ訪問、施設担当者会議、長崎県、宮崎県
- 19日 聖ザベリオ会司祭集会(宮崎県)
- 21日 スペルマン病院役員会(仙台)
- 25/27日 カリタス全国研修会(東京)
- 28日 男女修道会合同役員会(東京)
- 28日 社会福祉法人役員会(仙台)
- 30日 教区司祭団月例会(仙台)
- 2月6日 教区司祭団役員会(仙台)



仙台YBU・創立15周年行事

4月に 聖書美術展覧会を企画

仙台教区で独特の宣教活動を展開している仙台YBU文化センター（館長・R.ジョリコール神父）は、ことし創立15周年を迎えることになり、さまざまな記念行事を企画している。その主なものは4月1日から8日まで、

仙台市民会館で開催する聖書美術展覧会。小・中・高校生を対象にした、聖書題材の美術作品展は、5年前にも行われてたいへん好評を得た。今回はさらに充実したものにするため、すでに各学校に協力をお願いするなど準備をすすめている。

仙台YBU15周年記念の聖書美術展の実施要項は次のとおり。

行事内容 ①聖書美術展示②YBU文化教室

書道・華道・茶道展示③講演会④映画会

日時 昭和59年4月1日(日)～4月8日(日)

会場 仙台市民会館・展示ホール、小ホール

主催 仙台YBU文化センター

展示品 ①小・中・高生の応募作品②一般応募

募作品③賛助特別出品④聖書美術工芸

⑤キリスト教出版物展示（販売）⑥Y

BU文化教室書道・華道・茶道の展示

講演会 4月3日佐古純一郎氏（小ホール）

4月4日三浦 朱門氏（小ホール）

映画会 両日共に講演会に引続き（作品未定）

入場料 大人一〇〇円、子ども五〇円

映画と講演は五〇〇円

なおこのほか、4月中旬の長崎巡礼（一週間）、および6月10日（聖霊降臨祭）の15周年記念ミサ、祝賀会などを予定している。

聖書美術展の公募は各教会に呼びかけているが、信徒や教会学校の生徒多数の応募をのぞんでいるので協力しよう。

聖書美術展覧会公募規定



課題 聖書（旧・新約）を題材とする
作品種類 絵画（油絵、水彩画、素描、図画、日本画）、版画、工芸

点数・大きさ 絵画は一人一点、小・中学生は四つ切画用紙、高校生と一般は40号以下、共同制作品は2.5×2米以下

出品申し込み 昭和59年1月10日～3月10日

作品搬入 3月20日～3月30日

搬入先 仙台市上杉2-1-26

出品料 小・中学生二百円、高校生五百円

一般千円（団体出品20～49点は一割引き、50点以上二割引き）。

お問い合わせは電話〇二二一六1一五三四一番

仙台YBU文化センターまで。

今年の「集い」は郡山で

福島県連絡協・運営委

カトリック福島県連絡協議会はさる11月23日、郡山教会で運営委員会を開き、さきに行

われた福島県カトリックの集い（9月15日）の反省などを話し合った。

一、第14回福島県カトリックの集いの反省
良かった点 ①特別聖年行事のためもあって、参加者約三百人は始まって以来の盛況。とくに青年男女の参加が多かった。②佐々木信夫氏の話は、自分の体験であるだけに迫力があり感銘を与えた。

午後の部はスポーツに演芸に全員参加の熱演がみられ、とくに司祭方の出場が多かったのは教会内の平和にふさわしいものだった。

反省点 ①当日は雨天になり、突然プログラムの変更や係員の手不足が若干見られた。

希望事項 ①霊的な集会 ②こうしたレクリエーションを主とする集会は、別々に行えないだろうか。この件は検討事項となった。

二、昭和59年度第15回福島県カトリックの集い（9月15日）の開催地について

郡山教会の快諾を得て、郡山市を会場にすることに決定。集いの内容は実行委員会で案をたて、運営委員会に諮ることにする。

お礼とおねがい!!



昨年はたくさん教会報やニュースなどを送っていただき、ありがとうございました。今年もどうぞ、各教会や信徒の皆さんのニュース、話題、催し、感想、ご意見など、気軽に寄せ下さい。

また教会報もぜひ送って下さい。おねがいします。一教区報・編集係りー

受賞にかがやく 2 信徒

福島・野田町教会のよろこび

昨年 11 月、福島市野田町教会所属の信徒 2 人が、それぞれ次の受賞にかがやいた。

労働大臣賞 高木 秀雄さん

福島県文学奨励賞 中村有紀子さん

高木さんの労働大臣賞は、現代の卓越した技能士に全国から選ばれた百人のひとりとして与えられたもの。屋外広告美術部門で受賞した。現在、ハタヤ美芸社会長、福島県屋外広告美術協同組合相談役だが、広告美術の文字を書いて 50 年、その技術はプロの中でも絶品と評価された。また業界代表としてもつくされ、今なお現役として腕をふるい、業界や後進の指導に当たっている。

多忙な仕事にもかかわらず、家族全員を信者に育てられ、信徒会長、カノの会委員、墓地運営委員長など幅ひろく教会活動に力をつくされていく。11 月 22 日夜、信者が集まって祝賀会をひらいたが、席上モリソン神父は、「神からいただいた才能をみがき、職業を通して社会に貢献されていること。また教会活動にも奉仕していることはたいへん模範的で神の祝福が豊かなことを祈ります」と述べられ、今後の活躍を期待した。

中村有紀子さんは現在、福島女子高校の 3 年生。県文学賞は二十歳未満の者には奨励賞として与えられることになっており、この 2、3 年間該当者がなかった。「朝焼けの海」と題した小説部門で見事受賞したが、高校生活

の中での頑張りは相当なもの。

教会報「ばんだね」には小学 5 年の頃からたびたび投稿。その頃から才能の芽生えが見られたが、努力を重ねて今回の栄冠を得た。ますます精進されて、大いに才能をのばしてくるようみんなが期待している。

将来については「小説家とは限らず、活字のそばにいて、思っていることを字にできる職業につきたい」と希望をのべている。

キリスト教一致祈禱週間

1 月 18 日から 25 日まで全国的に行われる。今年のテーマは「主の十字架は一致への道」で、キリストの十字架はカトリック、プロテスタントを問わず全キリスト教会の核心。十字架は分裂によって惹起された苦難のしるしだが、同時に愛のしるし。十字架によって神と人類の一致、人類間の一致が回復される。教区内でも、プロテスタント教会とともに共同で一致のための祈りが捧げられる。

電話新設のお知らせ

仙台〇二二一六一三〇三四番

クレメント・ペインター神父

980 仙台市本町一丁目 2-12

元寺小路教会内



昨年 10 月から仙台教区で黙想会、練成会、研究会などの指導をされていますが、今回連絡用の専用電話を新設しました。黙想会などの申込み、打ち合せ、連絡にご利用下さい。

ベルナルド・マリートラハン神父

長年、仙台教区の各地で宣教司牧に活躍され、温和な人柄が親しまれていた、聖ドミニコ修道会トラハン神父が、さる 11 月 26 日午後 5 時 5 分、肺ガンのため入院先の東京・聖母病院で死去された。73 歳。

同神父は一九一〇年 1 月 14 日カナダ・ケベック州に生れ、三一年 8 月初誓願、三五年 4 月 25 日司祭叙階、二年後の三七年に来日。戦時中はたいへんな苦労を体験された。戦後は一関、築館、郡山教会を司牧、その後は渋谷修道院長、日本管区長（六三年から 8 年間）を勤められた。さらに 3 年前までの 10 年間、北仙台教会の主任司祭であった。

葬儀ミサは 11 月 28 日午後 1 時 30 分から東京南平台の渋谷教会で、同会ボリュウ管区長の司式によりドミニコ会司祭と仙台教区司祭 30 人が共同でささげた。仙台からも司祭、修道女、信徒ら多数が参加、その死を悼んだ。なお、遺骨は 12 月 5 日、福島市のドミニコ会墓地に埋葬された。

ヤコボ・平賀清八氏

教区カンテラリウス（書記長）平賀徹夫神父の父君平賀清八氏は、かねて病氣療養中のところ 11 月 26 日亡くなられた。82 歳。氏は令息・平賀神父から臨終洗礼を受けられた。葬儀は 11 月 26 日自宅で行われたが、12 月 6 日花巻教会において、平賀神父らにより追悼のミサが捧げられた。

新教会法解説①

ふさわしい信仰生活のため

安井 光雄神父

いよいよ昨年の11月27日(待降節第一主日)から新教会法が施行された。教皇様は、新教会法が司祭や司牧者あるいは教会法の専門家の専有物ではなく、すべての信徒に知らなければならないといわれている。一見、私たちに関係なさそうな教会法は、実は私たちの生活にとって基本的なものであり、身近なものである。これを知ることによって、私たちの信仰生活はもっとふさわしいものになる。そこで信徒に関係のあるものに限って、しかもその中から特に大切と思われることだけを選んで記してみよう。(信徒のことについては、カトリック新聞二七八二号、声誌10月号を是非お読み下さい)

教会法はだれのため?

まず、信徒という言葉をよく知っておくことが大切である。信者という概念よりはせまい。信者というと、聖職者も修道者のような奉獻生活や使徒職を専門にする人も含んだ言葉であるが、信者の中から上記のタイプを除きたいわゆる一般信者を信徒ということになっている。

つぎに誰がこの教会法を守る義務があるかという点、満7歳以上の、いま教会に属しているカトリック信者全員である(一一条)。もちろん、理性の行使が正しくできない人に

はその義務がない。

いままで、教会では、おとなは21歳からであったが、18歳に改められた(九七条)。それと関連して、大齋は18歳から60歳未満の信者までが守らなければならないことになった(一二五二条)。ちなみに小齋は、14歳から守らなければならない(同条)。

結婚のときに大事

血族や姻族(自分と自分の配偶者の血族・自分と自分の血族の配偶者のこと)の直系(親-子-孫など)の数え方に変化はないが、傍系親等の数え方が変わって、日本の民法の数え方と同じようになった(一〇八条)。旧教会法では、共通の始祖から見て系の長い方をとったが、今では両系の世数を合算する。それでオジとメイは旧教会法なら二親等であったが、今度は三親等で日本民法と同じになった。結婚のとき大切だから、注意しておきたいものである。

新刊紹介

平和の挑戦

(戦争と平和に関する教書) 米国カトリック司教協議会



昨年7月、日本司教団も「平和の望み」を発表したが、それに大きな影響を与えたと思われる全米司教団の平和司牧教書の日本語訳が完成した。教会の平和促進運動を具体的に提示するもの。信者必読の書。

中央出版社 一三〇〇円



今年の5月はじめに、教皇ヨハネ・パウロ二世が韓国教会を訪問する。韓国教会が創設されて二百周年、同時に殉教者百三人の列聖式が行われるという。

韓国教会は信徒数が約三十万人、非常に活動的だが、生い立ちには世界に類を見ない。日本や中国との交流で、すでに16世紀頃にも信者はいたらしい。しかし18世紀後半、北京でカトリックの教えにふれた韓国人が洗礼を受けて帰国、それがもとになって信者がふえた。一七九四年初めて宣教師が入国した時には、すでに司祭を知らない信者が四千人もいたという。

日本のキリシタンは司祭なしに、二百年以上も信仰を守り通した。韓国では司祭なしに、教会をつくり宣教を行った。もちろん、その後すぐ司祭を養成し、ヒエラルキヤを確立した。殉教の歴史も日本に劣らない。おそらくこういうことが現在の韓国教会の活発さを生み、発展につながっているのだろう。

仙台教区出身の早坂久兵衛司教は戦時中、大邱教区長だったし、私たちとの関係も深い。最も近い国、韓国教会との交流は、日本の教会に何かを教えてくれるのではないだろうか。(M)

さる11月12、13両日、「生きがい」をテーマにした第5回岩手県カトリック青年のつどいが、盛岡市の岩手カトリック・センターおよび盛岡大学を会場に行われました。岩手県内また宮城県からも約30人の青年たちが参加し、首藤正義神父様（白石教会主任）の2回の講話を中心に、親交を深める会やスポーツ大会も行い、心身ともに充実した楽しい2日間を過ごしました。

第一講話

まず「生きがい」というテーマで、参加者一人ひとりがテーマをどのように考えているか、グループごとにディスカッションをしてみました。

1. 「生きがい」をどう考えるか
2. 「生きがい」を感じるのほんな時か
3. 現在の「生きがい」は
4. これから先の「生きがい」に

各グループで話したことを発表しあい、それぞれが自分なりにテーマを考えた時間でした。以上を参考に神父様が第二講話の内容を考えて下さるとのことでした。

親交を深める会は、食べたり、飲んだり、話したり、歌ったり：。

12日は朝七時のミサにあずかりました。

盛岡大学に会場を移し、スポーツ大会。バスケ、テニス、などに汗を流しました。四ツ家

教会のバウマン神父様もサッカーに加わり、楽しいひとときをすごしました。

第二講話

盛岡大学構内に移築された旧四ツ家教会聖堂で、聖歌をうたつてはじめられました。

以下のメモ程度では講話のすばらしさをあらわすことが出来ませんが：。

「ふだんは生きがいということを考えなく過していますが、生きがいと問題となる時、考えなければならぬ時がある。青年期、老年期、そして人生の途上で苦しみや悩みにあつた時である」

第5回岩手県カトリック青年のつどい

報告書

青年会・前川裕子



「ふららふらら」という童話があります。その中に寺島さんという養老院のおばあちゃんがあります。彼女はいつもほほえんでいます。

「私の与えられるものは、このほほえみだけです。ただ：：ただ：：与える。与えて：：うれしかった：：人間というのはもらうだけではダメで、与えることに本当の愛があるのです」

「できるなら、生きがいの対象は永続するものであつた方がいい。たえず新しい発展を促すもの、創意工夫を必要とするもの：：」

「使命感」は大切なことです。キリスト者であるなら、かえがえのない人間のためにキリストが十字架にかかったことを知って、襟を正すはずです。そうすると生き方そのものが変わってくるはずですよ」

「生きがいの根底は感謝の心。自分にみち足りている人は不平不満がない。またまわりの人にその香りがたれよう」

「必要なことは知恵を養うこと。知識とはちがつています。知恵とは自分の中の知識をどのように使うかにかかわってきます。なにが大切かを判断する能力を養うのです」

「何が大切な判断は人それぞれの価値観による。そこから魅力ある人間が生まれる」

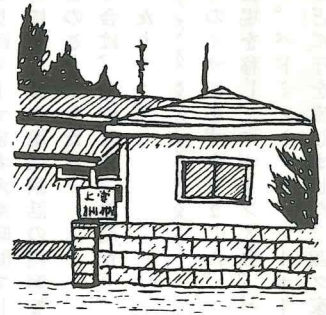
「物事に感謝するということは、とても大切なことです。その人自身の生きがいを培つてゆくものになるのです。感受性の豊かな人は、あたりまえのことに感謝する心をもっています。そういう人は生きがいの中を生きているといえるでしょう」

「生きがいは、自分の存在が誰かのために必要とされていると感じる時に感じます。ほかの人では替ることのできない、その人でなければならぬ存在：：。マザー・テレサの言葉に、＼最も重い病いは、人から必要とされていないと思ひこむことです＼というのが

講話が終つてから、また聖歌をうたい、祝福を受け、感謝のうちに終了しました。ほんとうにすばらしい、たのしい集いでした。

おらが教会 (39)

盛岡・上堂教会



盛岡市内には四ツ家教会(岩手カトリックセンター)、志家教会、そしておらが上堂教会の三つの教会があります。上堂教会は国道4号線からわずか百メートルの所にあり、仙台方面に向って左には北上川が満々たる水をたたえて流れ、右には白銀かがやく秀峰南部富士を望むことができます。望郷の詩人石川啄木が歌ったあの山、あの川です。豊かに恵まれた自然と、素朴な人情にはぐくまれ、心寄せる教会があつて、魂のふるさとを信じる私たちは本当にしあわせです。

教会は全く民家と間違えるような建物。その内部も同じで、お聖堂は八畳ほどの和室です。毎週のごミサに与る人は15人ぐらいですが、ご復活祭やクリスマスには30人以上になつて廊下になで溢れる有様です。大きい建物にしたいという声もありますが、せまい所で肩を寄せ合つてごミサに与るのも、またそれなりの親しさがあるようです。

上堂教会のユニークさは、畑があるということかも知れませんが、教会の裏の畑からは、

毎年、じゃがいも、にんじん、里芋、大根などを収穫しています。せっかくの日曜日に畑仕事をと大変な面もありますが、たまに土に触れるのも良い経験、共に汗かき合つて仕事をする中で、信者同士の交流も深められてゆくようです。お喋りの得意なご婦人のこと、草取りをやっているかと思えば、にぎやかに話に花を咲かせているといった、ほほえましい光景がよく見られます。上堂教会はこの畑仕事にかぎらず、働きものの女性の手で運営されていることがほとんどいつても過言ではありません。夏休みの子供会サマーキャンプや教会文庫の整備充実、土曜日の教会学校の世話役、そして食事会の時の準備からあと片づけまで、女性なしにはなにひとつ成り立たない有様です。

私たちは「教会訪問」といつて、毎年一度バスを利用してよその教会を訪問しています。これまで久慈教会、遠野教会などに行つてきました。今年も寿庵祭に参加しました。よく晴れた6月の空を仰ぎ、高速道路を飛ばして水沢まで。子ども参加も多く、楽しいにぎやかな一日でした。おつちよこちよいのカメラマン(は誰?)がいて、みんなの写真をとつたのはいいが、なんとそのカメラにはフィルムが入つていなかった、という笑うに笑えないお話もありました。

さて、上堂教会の歴史はといえますと、一九六三年(昭和38年)のクリスマスに献堂式をしたのが始まりですから、ちょうど満20歳で成年を迎えたわけです。初代の主任司祭は

マンブレ神父様で一九七〇年まで。その後は現在に至るまでペトレム宣教会の管区長でもあるツゲル神父様が、私たちの指導にあつておられます。明朗潤達な方で、ジョークの好きな反面、社会問題にも関心が深く、教会のワクを越えてさまざまな方面に活躍しているお忙しい神父様です。

ことし成人を迎えた私たちの教会の課題といえ、教会内での人間的なつながりを深めてゆくと共に、一人ひとりが日本の社会に根ざした独立した信仰をもつことだと思ひます。福音の社会化といいますが、自分が働く場を通して、正義と平和の実現のために努力することが大切でしょう。いつまでも女性におんぶするのではなく、男性がもつと活躍することが望まれているのかも知れません。しかしなせ信徒の数も少なく、社会の無知、誤解もあります。その中で私たちはどう生きてゆくのか。おそらくこれは、日本のすべての教会の課題でもありましよう。(黒沢 勉)

【編集後記】



多難な新年を迎えることになった。しかし考えればこのころ、いつも危機感みたいなものに脅かされている。緊張感というより、ストレスという現代病なのだろうか。

そういえば昔は万事にのんびりしていた。いまはなんともセカセカで、その割に成果はそれほどでもないらしい。

人間が仕事をするのではなくて、仕事に人間がコキ使われている……。なまけ者のたわごとかも知れないが……。(M)